

本科 1 期 5 月度

解答

Z会東大進学教室

高2東大国語



【問題】（演習）

出典：『玉堂叢語』／早稲田大学 97年・東京学芸大学 01年・改題

書き下し文

景公清國学に遊びし時、同舎生に祕書有り。公求むるも與へず。固く請ひ、明日に即ち書を還さんことを約す。生旦に往きて索む。曰く、「吾何の書なるかを知らず、亦た未だ書を汝に借らず」と。生忿り、祭酒に訟ふ。公即ち借る所の書を持して往きて見ゆ。曰く、「此清の燈窗業とする所の書なり」と。即ち誦じて卷を徹す。祭酒生に問ふに、生一詞をも誦ずること能はず。祭酒生を叱りて退かしむ。公出でて、即ち書を以て生に還す。曰く、「吾子の珍祕すること太甚しきを以て特だ相ひ戯れしのみ」と。

現代語訳

景公清が国子監に遊學していた頃、同じ宿舎の学生が珍しい書物を持つていた。景公が（その書物を）求めて、（学生は景公に）渡そうとはしなかった。（そこで景公は）強く頼み、翌朝に書物を返すことを約束し（てその書物を借り）た。学生が（翌）朝に（景公のもとへ）往つて（書物を）求めた。（すると景公が）言うには、「私は（あなたのいう書物が）どういう書物であるかを知らないし、また（私は）今まで書物をあなたに借りた覚えはない」と。学生は怒り、祭酒〔国子監の長官〕に（景公が書物を返さないと）訴えた。（祭酒に呼び出された）景公は、すぐに借りた書物を持って（祭酒のところへ）往き、（祭酒に）お会いした。（説明を求められた景公が祭酒に）言うには、「これ〔この書物〕は私が常に学んでいる書物です」と。（景公は）即座に（書物の内容を）暗誦し、（その暗誦は）書物の最後にまで及んだ。祭酒が学生に問うてみると、学生は（書物の中の）一言さえも覚えていなかつた。（そこで）祭酒は（訴えを不当とし）学生を叱つて退席させた。景公は（祭酒の部屋）出て、すぐに書物を学生に返した。（景公が）言うには、「私はあなたが（この書物を）むやみに大事に秘藏するものだから〔秘藏するだけで読みもしないようだから〕、ただあなたをちょつ

とからかってみただけだ」と。

解答

問1 a うつたう b のみ (と)

問2 甲 遊学 乙 探索

〔いざれも解答例〕

問3 A またいまだしょをなんじにからず

C さいしゅせいをしかりて (しつして) しりぞかしむ

問4 (口)

問5 (木)

【問題】(自習)

出典：『稽神錄』／センタ－試験国語I 00年・改題

書き下し文

新安の人閻居敬、居る所山水の浸す所と為る。屋の壊れんことを恐れ、榻を戸外に移して寝ぬ。一烏衣の人を夢見る。曰はく、「君水を避けて此に在り、我も亦た水を避けて此に至る。君に於いて何をか害ひて我に迫迫ることは是くなるや。不快なること甚だし」と。居敬寤め、其の故を測らず。爾の夕三たび夢みる。居敬曰はく、「豈に吾當に此に止まるべからざるか」と。因りて命じて牀を移さしむるに、乃ち牀脚斜めに一亀を戸限の外に压す。之を放てば乃ち去る。

現代語訳

新安の人である閻居敬は、住んでいる所〔＝家〕が山から流れてきた水で水浸しになってしまった。（閻居敬は浸水した）建物が壊れてしまふのを恐れ、寝台を外に出して（そこで）寝た。（寝ている最中）一人の黒い服を着た人を夢に見た。（その人が）言った。「あなたは（山から流れてきた）水を避けてここにいて〔＝ここに移ってきて〕、私も（あなたと）同様に水を避けてここにやつてきた。（私が）あなたにどういう迷惑をかけたということで私を虐げることがこのようであるのか〔＝私はあなたに虐げられなければならぬような迷惑をかけたのか〕。不愉快なことこの上ない」と。居敬は目を覚まし、（しかしどうしてそのような夢を見たのか）理由がわからなかつた。この夜（同じ夢を）三回見た。居敬は言つた。「私はここに止まつていてはいけないのでなかろうか」と。そこで（使用人に）命じて寝台を移動させてみると、寝台の脚が斜めに一匹の亀を敷居の外で押さえつけていた。亀を放してやると、（亀は）そのまま去つていった。

問1 (ア) 推測 (イ) 解放 「いざれも解答例」

問2
②

問3 とうをこがいにうつしていぬ

問4 牀脚斜圧一龜於戸限外

問5
①

問6
④

問1 基本的な字義の問題だが、漢文に限らず、国語で知らない漢字、わからない漢字が出てきた場合の考え方の問題ととらえて欲しい。知らない漢字やわからない漢字が出てきた場合、

- ①その漢字の訓読み
 - ②その漢字の部首
 - ③その漢字を用いた熟語
 - ④前後の文脈
- などの点から考えるのが基本。この設問の場合は、「その漢字を用いた熟語」を要求している。(ア・イともに「訓読み」「前後の文脈」から答えが出る。

(ア) 「測」は、構文上述語動詞であり、「其の故」という目的語を伴っている。「故」は「理由」などの意味である点から、「はかる」と訓読みし、「理由をはかる」つまり「考える」「推量する」ぐらいの意味であると判断できる。したがって「推測」などの熟語が答えとなる。

(イ) 「放」は「ほうる」「はなつ」などの訓があるが、これも述語動詞で「之」という目的語を伴っていて、この指示語「之」が何を指すかを考えれば難しくはない。言うまでもなく「之」が指すのは「一亀（一匹の亀）」で、「（寝台の脚に押えられていた）亀を」「放」する、ということだ、と考えれば、「解放」などの熟語に思い至るだろう。

問2

設問部分「所居為山水所浸」の「為山水所浸」は、形としては「為A所B」の、いわゆる受身のパターンである。「AのBする所と為る」「Aの為にBせらる」と訓読し、「AにBされる」という意味。「浸」は「浸水」という熟語があることからもわかるよう、「水につかる」ということで、主語が「所居（住んでいる場所）」なので、「住んでいる場所が水浸しにされた」ぐらいの意味である。その点で②・⑤のいずれかが正解になるが、構文上⑤はダメ。「為A所B」は、「（構文上の主語）—為—A（実質動作主、この場合は「山水」）—所—B（述語、この場合は「浸」）」という構文であり、⑤は実質動作主である「山水」を「山」と「水」の一語に分け、「山」を主語「所居」の述語として解釈してしまっている。

問3

一般的に、書き下し（訓読）をする際のポイントはいくつもあるが、何よりも重要なのは次の三点である。

- ①前後の内容と矛盾せず、意味としてつながっていること
- ②漢文の語順に気をつけること
- ③活用語の活用や付属語については原則的に古典文法に則ること

特に「語順」は、構文を把握する上できわめて重要である。

具体的に書き下しをする際には、まづどの字が述語動詞であるか、という点から見てゆくとよい。設問部分「移榻於戶外而寢」では、まず「移」が述語動詞であることをおさえる。すると、語順から考えて「榻（目的語）—於（置き字）—戶外（補語）」という形であることがわかる。なので「移榻於戶外」の部分は「榻を戸外に移す」という書き下しになる。また、「而」は「述語動詞—而—述語動詞」の形で用いられる接続詞（「而」には「なんぢ」という人称代名詞としての意味もあるが、この場合はそのよ

うに読むと意味が通じないし、語順の点からも無理がある)で、したがって最後の「寝」は述語動詞である。つまり設問部分を述語のつながりとしてとらえると、「移して寝る」という意味である。「寝る」は現代語で、古典では「寝ぬ」。「榻を戸外に移して寝ぬ」がこの部分の書き下しとなる。

問4 閻居敬が水を避け、寝台を移動して寝てみた夢の中で、黒い服を着た人から不快を訴えられ、寝台を動かしてみると寝台の脚が亀を押さえつけていて、放してやると亀は去つていったという話の内容から、閻居敬の夢に現れて不快を訴えた「一烏衣人」というのが後段の「因命移牀」以下に出てくる「亀」であることは明らかで、その「亀」が「不快甚矣（不快なことこの上ない）」という理由は何か、という設問なのだから、「亀」が不快に感じるような状態や事柄を探せばよい。

問5 返り点の原則通りに考えれば問題ないが、「当」がポイントといえばポイント。再読文字で「当に（述語動詞）べし」と訓読し、返り点は「当」と後ろの述語動詞から返る。まず副詞「まさに」と読み、後ろの述語動詞から返つて助動詞「べし」と訓ずる（だから再読文字というのだが）字である。ちなみに、「豈（乎・邪など）耶」は反語の形。

問6 一つ一つの選択肢が長い内容一致問題では、本文の記述と事実関係の点で矛盾するものから消去してゆくのが基本。**①**は「家が水害で壊れて」「神が亀を助けに現れた」がおかしい。「家の壊れんことを恐れ」とはあるが、「壊れた」とはかかれていないし、夢の中に現れたのは「神」ではなく亀自身である。**②**「飼っていた大事な亀が」云々がダメ。夢の中に現れた「一烏衣人」イコール「亀」と考えるのが自然なので、この選択肢では「亀」と「一烏衣人」が別の存在ということになつていて。**③**「閻居敬が」身動きがとれなくなつたで不正解。身動きがとれなくなつたのは「亀」で、だから夢の中に化身して不快を訴えたのである。また「かつて閻居敬に恩を受けた亀」というのが根拠がない。**⑤**「一匹の亀が」閻居敬に助けられた「恩返しをしようとも現れた」いずれも本文中の記述と矛盾する。水浸しになつたのは「亀」の「住処」ではないし、閻居敬の夢の中に現れたのは「恩返し」のためではなく不平を訴えるためである。

【問題】（演習）

出典：「説苑」／岩手大学 99年 改題

書き下し文

景公馬有り。其の圉人之を殺す。公怒り、戈を援りて將に自ら之を擊たんとす。晏子曰く、「此其の罪を知らずして死す。臣請ふ君の爲に之を數め、其の罪を知らしめて之を殺さん」と。公曰く、「諾」と。晏子戈を挙げて之に臨んで曰く、「汝吾君の爲に馬を養ひて之を殺す。而の罪死に當る。汝吾君をして馬を以ての故に圉人を殺さしむ。而の罪又死に當る。汝吾君をして馬を以ての故に人を殺し、四隣の諸侯に聞えしむ。汝の罪又死に當る」と。公曰く、「夫子之を釋せ。夫子之を釋せ。吾仁を傷つくること勿れ」と。

現代語訳

(齊の)景公が馬を持つていた。その馬役人が(誤って)馬を殺してしまった。景公は怒り、戈をとつてみずから馬役人を撃ち殺そうとした。(それを見た)晏子が(進み出て)言うには、「この馬役人は自分の罪を知らないまま死ぬことになります。私はお願ひします、公に代って(私が)この馬役人を責め、自分の罪を自覚させてからこの馬役人を殺しましょう」と。景公が言った、「よからう」と。(そこで)晏子は戈をとりあげ、馬役人の前に立つて言つた、「お前はわが君主のために馬を養い、殺してしまった。お前の罪は死にあたる(=死刑に相当する)。お前は私の君主に馬を理由に「=たかが馬を殺したこと」で馬役人を殺させる。お前の罪はさらに死にあたる。お前は私の君主に馬を理由に人を殺させ、周りの国々の諸侯に(たかが馬のために人を殺したという評判を)伝えさせる。お前の罪は死にあたる」と。(それを聞いていた)景公は言つた、「大夫よ、その馬役人を許してやれ。大夫よ、その馬役人を許してやれ。私の仁徳を傷つけないようにしてくれ」「たかが馬のことで人を殺したという悪い評判が立たないようにしてくれ」と。

問1 ア 馬 イ 園人

問2 而

問3
・王の馬を殺してしまったこと。

・王に馬を殺したという理由で馬役人を殺させること。

・王に馬を殺したという理由で人を殺させ、その評判を四方の国々に伝えさせること。

問4
まさにみずからこれをうたんとす

問5
馬を殺したために馬役人を死刑にするような仁愛の徳に欠ける行為は、君主としてふさわしくないから。〔47字・解答例〕

君主には仁徳が必要であり、些細なことで馬役人を殺すと自分が君主としてふさわしくないことになるから。〔49字・別解例〕

【問題】(自習)

出典：『韓非子』 外傳說左上 第三十三／早稻田大学 第一文学部 88年・改題

書き下し文

曾子の妻市に之く。其の子之に隨ひて泣く。其の母曰はく、女還れ。顧反らば女の為に彘を殺さんと。市に適きて來るに、曾子彘を捕へて之を殺さんと欲す。妻之を止めて曰はく、特だ嬰兒と戯れしのみと。曾子曰はく、嬰兒は與に戯るに非ざるなり。嬰兒は知有るに非ざるなり。父母を待ちて學ぶ者なり。今子之を欺かば、是れ子に欺くことを教ふるなり。母子を欺き、子にして其の母を信ぜざるは、教へを成す所以に非ざるなり。遂に彘を烹る。

現代語訳

曾子の妻が市場に出かけた。その子供が母のあとを追つて泣いた。(そこで) その母は(子供に) 言った、「お前、お戻りなさい。(家に) 帰つたらお前のために豚を殺して料理してあげよう」と。(曾子の妻が) 市場に行って帰つてくると、曾子は豚をつかまえて殺そうとした。妻はそれを止めて言った、「(私は) ただ子供相手にふざけ(て言つ)ただけですよ」と。(すると) 曾子は言った、「子供は、それを相手にふざけるものではない」「子供を相手に冗談を言うものではない」。子供は知恵があるわけではない。父母(の教え)によつて学んでいく者である。今お前が子供をだましたら、それは子供にだますことを教えることになる。母が子をだまし、子が自分の母を信じないようなことは、教えるということではない」と。そのまま豚を殺して煮たのだった。

解答

問1 (b)

問2 (甲) ゆく

(乙) これに

問3 (イ)

問4 (オ)

- 問5 (2) 特與嬰兒戯耳。(「特與嬰兒戯耳。」・「特與嬰兒戯耳。」なども可。)
(3) 非其所以成教也。(「非其所以成教也。」でも可。)

問1 文中で使われている語句の意味を判断する問題。「子」には、いくつもの意味があるが、思い浮かべる必要があるのは、主に次の三つ。

① 子ども（親やおとなに対して）、② 男子の敬称（例：孔子、孟子など）、③ 二人称の敬体（あなた）。

本文には、②に該当する「曾子」もてくるが、傍線が付されていないから除外して、残りの①・③の意味で考えていく。そうすると、(a)・(d)・(e)は、母に対する「子」であることは明白である。そこで、(b)・(c)について考えてみる。(b)が「子」であるとすれば、子が母を欺いたことになり、内容が逆になってしまふから、(b)は、「あなた」という意味の、二人称である。曾子は、妻をそのように呼んでいるのである。

問2 傍線部（甲）・（乙）ともに「之」だが、それぞれ構文上違う位置にあって、文中において果たしている機能が違うことがポイント。

（甲）は「曾子之妻」という名詞句の直後にあり、「市」というこれも名詞から返って読むように返り点が施されている。名詞から返つて読むのは一般的に述語動詞と前置詞だが、この場合「之」を前置詞と考えてしまうと述語のない文になってしまふ。したがつて「曾子之妻」（主語）—「之」（述語動詞）—「市」（目的語あるいは補語）という構文である。「之」が述語動詞として機能している場合、「ゆく」と訓ずる。それに対して（乙）は「隨」という述語動詞の後ろにあって、述語動詞に返つて読むのだから、目的語・補語と考えられる。「之」が名詞（句）の位置にあるときには「これ」と読む。元来漢文には「品詞」という概念がなく、そのため日本語に直すと同じ字がさまざまな品詞として機能する。したがつて私たちが漢文を相手にするときは、何よりも語順・構文に注意して読むという発想が重要になる。ちなみに、「之」が名詞（句）を修飾する位置にあるとき（たとえば「曾子之妻」の場合など）には「の」あるいは「この」と読むことも知つておくとよい。

問3 白文を解釈する問題。ただし、選択肢から解答を選ぶので、それほど難しくはない。選択肢の大きな差異は、傍線部の主語と、「適」の解釈にある。

まず、傍線部を直訳してみる。傍線部の構成を考えると、二文字目の「市」は、冒頭の「曾子之妻之市。」の「市」で、名詞である。すると、最初の「適」は、名詞の前にあるから、動詞で、これが述語になり、下の「市」を、目的語または補語として

とつて いることがわかる。動詞の「適」には、「～にぴったりと合う」という意味（「かなフ」と読む、例・「適當」「適性」）と、「～に行く」という意味（「ゆク」と読む）があるが、ここでは、下の「市」が場所であることから、「行く」の方である。最後の「來（来）」は、「やつてくる」という意の動詞としか考えられない。

したがつて、傍線部を直訳すると、「市場に行つてやつてくる」となる。この直訳からは、選択肢(工)の「呼び寄せる」、(オ)の「待つて」は、出てこない。

次に、これは誰の動作なのかを、前後の文脈から考える。傍線部の前では、曾子の妻が市場に行くとき、その子もついて行つて泣きだした。そこで、妻は子に向かつて、「先に帰りなさい、そうすれば豚を殺してごちそうを作つてあげる。」と言つっている。そして、傍線部の後で、曾子が豚を殺そうとしていて、それを見た妻がそれを止めているのである。曾子のこの行動は、先に帰つてきた子から妻がした約束を聞き、それを実行しようとしたわけである。

「曾子が市場に行つた」という記述はどこにもないので、選択肢(ア)は不適切。また、(ウ・カ)と解釈すると、曾子の子が戻り、約束のことを話す前に、曾子が豚を殺そうとしていたことになり、おかしい。したがつて、正解は(イ)。

問4

会話文を指摘する問題。曾子の言葉は3行目「嬰兒」から始まるが、まず、この言葉は、どういう状況のもとで、誰に向かつて発せられたのかを考えよう。この曾子の言葉は、「彘を殺す」という、子にした約束を、妻が冗談だと言つたことに対して発せられている。冒頭の一文が白文となつてゐるが、ここの「與」は、「戯」という動詞の直前にあるから、副詞で、「與に」と訓読する。この一文は、「嬰兒は與に戯るるに非ざるなり」と訓読し、「子供は冗談を言う相手ではない」と言つてゐる。その後、子は親から学ぶのだから、親は子に対して、信頼にのつとつた模範を示すべきだと語つてゐるのである。傍線部(b)の「子」は、敬意を含んだ、妻への呼びかけの言葉であり、この文に「子に欺くことを教ふ」とあって、それが次の文に「母子を欺き、子にして其の母を信ぜざるは、～」と続くのであるから、(オ)の「教也」までが曾子の言葉と考えられる。

(ウ)であるとすると、「遂に彘を烹る」も曾子の言葉となる。しかし、「彘を烹る」という自分の動作に、「遂に（とうとう）」という副詞をつけるのは不自然で、「我欲烹彘。」というふうになるのが自然だろう。

問5

(2) 白文を相手にしなければならない問題で、これも語順・構文から考えてゆくが、その前に、この場合は「妻」の曾子に対する

る会話文の中にある表現であるという前提を確認しておく必要がある。当然、続く曾子の会話文の内容（子供は親を見て育つ、子供を欺くことは、子供に人を欺くことを教えるも同然である）と矛盾をきたさないように解釈する必要がある。

白文を相手にする際のポイントは、まず、どの字が述語動詞であるかという点から考えてゆくのが常道。この場合、字義から考へて述語動詞でありうるのは「與」「戯」の二つだが、「嬰兒（つまり子供）」が「與」の直後にある点から考えて、「與」を述語動詞ととらえてしまうと、「嬰兒」が目的語・補語ということになり、「嬰兒に与えて戯れる」あるいは「嬰兒」を補語、「戯」を目的語として「嬰兒に戯れを与える」などという意味とするほかなくなるが、いずれにしても「與」えたことになり（つまり欺いたことにならず）、それでは直後の曾子の会話文の内容と矛盾をきたしてしまう。したがって「與」を述語動詞と考えることはできない。すると、「與嬰兒戯」の部分は、「戯」が述語動詞、「與」は「嬰兒」という名詞とともに述語動詞の前に位置するという構造である。このように「與（与）」が述語動詞の前に名詞を伴つて位置している場合、前置詞として機能し、「～と」「～と與（与）」（この場合は「嬰兒」と「嬰兒と與（与）」）と訓読する。なお、前置詞の位置にあって名詞を伴つていない場合は名詞が省略されたと考えて「與（与）」と訓ずる。「與（与）」は、述語動詞として機能している場合は①あたふ②あづかる③くみす④ともにす、などと訓じ、前置詞の場合は「～と・～とともに」となり、文末に位置する場合は「～か」という疑問・反語の助辞になるなど、非常に多くの用法を持つた字である。どの用法で用いられているかを判断する根拠は、語順・構文である。

あとは最初の「特」と最後の「耳」だが、「特～耳」の形はいわゆる「限定形」で、「特だ～のみ」と訓読することを知つていれば問題ないだろう。

最後に、老婆心ながら付け加えておくと、述語動詞「戯」は後ろに「のみ」という副助詞が接続するので「戯るる」と連体形に活用することに注意（ちなみにこの場合は「戯れた」ととらえ、過去の助動詞「き」を用いて「戯れし」としてもよい）。

- (3) 「也」は、文末にあるので、断定を表す語で、最後に訓読するか、または訓読しなくてもかまわない。
「非」は「あらず」と読み、直後の名詞、または名詞相当句を否定する語である。訓読する際は、否定する語句を先に読み、それに「ニ」という送りがなをつけて返る。

「所以」は、熟語扱いをする語句で、「ゆえん」と読む。動詞の前に置かれて、①「～する原因・理由・わけ」、②「～する方法・手段・材料」、③「～するもの・こと」という意味を表し、名詞相当句を作る。直後の動詞を連体形で読んでから返る。

「非」も「所以」も返読文字だから、この下の「成教」を先に読む。二語の構成を考えると、「成」は、「ナル」または「なス」

と読む動詞だから、直後の「教」は、その補語、もしくは目的語となる。どちらの場合でも、「教」は名詞であり、「教える」と「教え」の意で、「おしえ（へ）」と読む。

「成」を「ナル」と訓読する場合には「通りあり、ひとつは、「学難<シレ>成」「大器晚成」と使われるよう、「できあがる・完成する」という意を表し、後に語をとらない。また、直後に、「青年」や「老人」などの成長段階、地位・役職名、「病」などの状態を表す補語がきて、「～という立場・状態になる」という意を表す。

傍線部の場合、「教」は、立場や状態を表す語ではないから、「成」を「～を成し遂げる」の意ととり、その目的語と考えることになる。「目的語→述語動詞」の順で訓読するから、「成教」には、「成^ス教^ヲ」という訓点が付けられる。

さて、「成教」というひとまとまりの語句の前に「所以」が付けられているから、「所以成教」で名詞相当句となる。訓読する際は、「成」から「所以」に返ることになる。熟語に返る場合は、二字の中間に「一（ハイフン）」を入れ、その左脇に付ける。「一」はなくともかまわない。また、熟語に返る場合は、レ点が付くことはない。一字から熟語に返る場合でも、間に二字置くことになるからである。

「成す」は四段動詞で、終止・連体形が同形だから、「所ニ以成^ス」と訓点が付けられる。「成^ス教^ヲ」と合わせると、「所ニ以成^ス教^ヲ」となる。

そして、「非」は「所ニ以成^レ教」という名詞相当句を否定していることになる。訓読する際は「所ニ以」から返るから、「所ニ以」の下に送りがなの「ニ」を付け、「非」の下に三点と、送りがな「ズ」（「也」）につなげるなら「ザル」を付ければよい。

●
メ
モ
●